OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪大学における課外の多言語多文化学習支援ネットワーク構築 ： 複数部局間の協働による成果と今後の展望
Author(s)	瀬井, 陽子; 中村, 瑞樹; 坂田, 絵理子 他
Citation	大阪大学国際機構研究論集. 2026, 30, p. 49-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学における課外の多言語多文化学習支援ネットワーク構築

―複数部局間の協働による成果と今後の展望―

瀬井　陽子*・中村　瑞樹†・坂田　絵理子‡・原谷　千恵§・安部　麻矢¶・安部　陽子[a]
高木　千恵[b]・東条　佳奈[c]・中橋　真穂[d]・義永　美央子[e]・難波　康治[f]

要　旨

本稿は、大阪大学における全学的な多言語多文化学習支援を担う部局間の協働を目的に構築されたネットワークの形成過程とその意義を報告するものである。近年、大学では課外の学習支援ニーズが高まり、教員・職員・学生が連携しながら支援を行う体制の整備が求められている。大阪大学では、複数の部局が言語学習や多文化交流を支援する取り組みを展開し、学生の多様なニーズに応じてきたが、それぞれが独立して運営されてきたことから、情報共有や相互連携に課題があった。そこで、本稿では、各部局が協働してネットワークを構築し、情報交換会を継続的に実施するに至った背景と経緯を述べるとともに、各取り組みの概要を示す。考察の結果、ネットワーク構築と情報交換会は、担当者にとって他部局の知見に触れ、事業運営の改善に生かす機会となっていると同時に、学生への支援体制の質的向上に寄与していることが明らかとなった。

【キーワード】学習支援、正課外活動、多言語多文化学習、部局間連携

1　はじめに

大阪大学は、3つのキャンパスを有し、2025年5月現在で、学部学生15,111名、大学院学生8,123名、外国人留学生2,719名、外国人研究者1,148名が通う大規模総合大学である（大阪大学 2025）。執筆者らは、大阪大学で提供されている課外の多言語多文化学習支援の運営やコーディネーター業務を担当している。学内では、多言語多文化学習支援の場が複数の部局によって提供されており、各部局の特徴やニーズを踏まえた多種多様なサポートが展開されている。しかし、1つの部局のみの事業運営では、人員、スペース、教材、予算などに限りがあり、学生の多様なニーズに十分に応えられていないことや、他部局との類似サポートの重なりについて、現場も執行部も把握しきれていないことが課題であった。

このような背景のもと、2022年12月に国際教育交流センター[1)]の教員が主導となり、多言語多文化学習支援の運営担当者同士の情報交換会が開かれた。その後、半年に1回のペースで、計7回の情報交換

* 大阪大学国際機構 特任助教（常勤）
† 大阪大学大学院人文学研究科 特任助教（常勤）
‡ 大阪大学附属図書館 図書職員
§ 大阪大学全学教育推進機構 事務補佐員
¶ 大阪大学マルチリンガル教育センター 特任講師（常勤）
[a] 大阪大学国際機構 特任講師（常勤）
[b] 大阪大学大学院人文学研究科 教授
[c] 大阪大学大学院人文学研究科 講師
[d] 大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター 助教
[e] 大阪大学国際機構 教授
[f] 大阪大学国際機構 准教授

会が実施されている。また、令和6年（2024年）度に文部科学省の大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業に本学が採択された際には、3キャンパスを繋ぐ学内連携「多文化共修推進ネットワーク（仮称）」の構築が大学全体のプロジェクト計画の一部として組まれることとなった。

本稿では、大学における課外の学習支援の概要、ネットワークの構築の背景、各担当者が運営している取り組みの概要、担当者による情報交換会による成果、今後の展望と課題を報告する。

2　大学における課外の自律的な学習支援

本節では、大学における課外の学習支援を概観する。大学での正課外の学びに注目が集まるようになったのは、1960年以降である。ヨーロッパで、自律的な学習を支援する目的でSALC（Self-Access Learning Center）が設立され、それ以降、世界中に設立されるようになっていった（Gardner, D.,& Miller, L. 1999）。また、北米では、1990年代にデジタル資源を利用する場として登場した「インフォメーション・コモンズ」が、「ラーニング・コモンズ」に転換されていった。その背景として、学習理論の転換、すなわち「知識の伝達」重視から「知識の創出・自主的学習」への移行がうたわれたことがある（米澤 2006）。

日本では、2000年代に入ってから外国語学習に特化した自律学習支援施設が設立されるようになり、現在、日本自律学習学会（The Japan Association for Self-Access Learning）には、約60のSALC施設が登録されており、その多くは英語学習に焦点を当てたものである（JASAL 2025）。また、2006年以降、学生が能動的学修のために集うことのできる共有スペースとして、大学に「アクティブラーニングスペース」や「ラーニング・コモンズ」の名称の施設が次々と開設されるようになり、図書館や全学教育を担当する部局が運営母体としてこれらの施設で学習支援を行うようになっていった（加藤、小山 2012）。

政策面に目を向けると、文部科学省によって2012年に示された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」では、学修支援環境の整備についての課題が挙げられており、2018年に示された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」では、生涯学び続ける力や主体性を涵養すること、そして、大学で学ぶ学生を取り巻く関係者の協働の重要性が述べられた。

以上のことから、SALCやラーニング・コモンズなど大学における課外学習支援は、国際的な動向と、日本の高等教育政策の後押しを受け、また、生涯学び続けるための資質・能力を育てる場として、施設・関係者・支援活動が大きく広がりつつあるといえる。

3　学内の担当者ネットワークを構築する意義

河井（2014）は、大学における教育実践において、授業内の学習に加え、授業外での学びにも目を向ける必要性を指摘している。従来は、複数のコースを共通して履修する学生集団がラーニング・コミュニティとして捉えられることが多かったが、河井は授業外の活動も含め、学生・教職員・その他の多様な他者が協働する多層的な支援によって、大学生の学びが支えられていると述べている。

林ら（2023）は、河井（2014）が指摘した学習支援研究の課題、すなわち、図書館における学習支援など特定領域に研究が集中してきた一方で、学習支援の担い手である教員・職員・学生の協働や連携に関する研究が不足していることを踏まえ、大学における学習支援の全国調査を実施している。その結果、学習支援の担い手は教職員、専門職、学生などへと多様化が進んでおり、とりわけ専門職の必要性が謳われていること、また担い手の育成や確保が課題であることが明らかにされた。さらに、質問紙調査および個別大学の事例研究の分析から、効果的な自律学習支援を実現するためには、全学的な学習支援機関が部局の関連部署と連携し、正課内外にわたる多様な学習支援を提供する体制を構築することが重要であることが示唆されている。

大学における学習支援は、授業科目やカリキュラムに埋め込まれたもの、教職員・学生以外にもステークホルダーによって担われるもの、など様々である（林ら 2023）。大阪大学では、全学の構成員を対象とした多言語多文化学習支援の取り組みが各種実施されている。これらは、正課外としての学習支援となっており、学習支援の担い手は、教員・職員（事務・図書系）・学生である。また、学習支援のアプローチとしては、自律（自立）学習、アドバイジング、ピア・サポートなどが取り入れられている。しかし、これらの取り組みは3キャンパスに分散しており（表

1参照)、十分な横の連携が取れない状況にあり、それぞれが課題を抱えつつ試行錯誤しているのが現状であった。

また、関谷ら（2010）は、自律学習促進の成果を上げているSALCは、以下の9つの要素を持つ傾向にあると述べ、(1)学習リソース（印刷教材、マルチメディア教材、オンライン教材など)、(2)個別学習エリア、(3)グループワーク用エリア、(4)学習支援デスク、(5)アドバイジングサービス、(6)ライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポート、(7)学習法などについてのワークショップや催しのプログラム、(8)学習者ができるだけ自然な環境で目標言語を使えるような機会、(9)学習共同体を形成する場、を挙げている。

大阪大学における多言語多文化学習支援の各取り組みにも、学生の効果的な自律学習を可能にするSALCとしての構成要素が部分的に含まれているものの（表2参照)、部局単位での運営では人員、スペース、教材、予算などに限りがある。そこで、各取り組み同士のネットワークを構成し、互いの不足を補完しあえる環境整備ができれば、学生によりよい学習支援を提供できると考え、国際教育交流センターの教員が発起人となり、各運営部局に声をかけて、情報交換会を実施することにした。

表1．全学を対象とした多言語多文化学習支援

	取り組み名	運営部局	言語			キャンパス				活動内容				
			日本語	英語	多言語	豊中	吹田	箕面	オンライン	話す	書く	読む	個人	グループ
1	ラーニング・サポートデスク	附属図書館	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
2	e-Bookで多読	附属図書館	○	○					○			○	○	
3	多言語カフェ	全学教育推進機構		○	○	○				○				○
4	OUマルチリンガルプラザ	マルチリンガル教育センター、国際教育交流センター	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○
5	タンデム学習プロジェクト	人文学研究科・文学部	○	○	○	○			○	○	○		○	
6	日本語・英語・多言語カフェ	国際教育交流センター	○	○	○	○	○	○		○				○
7	ランゲージサポートデスク	工学研究科国際交流推進センター		○			○		○	○	○		○	○
8	アカデミックイングリッシュサポートデスク	人文学研究科・外国語学部		○			○		○	○	○		○	

表2．SALCの構成要素別に見た支援内容

	取り組み名	運営部局	学習リソース（印刷教材、マルチメディア教材、オンライン教材など）	個別学習エリア	グループワーク用エリア	学習支援デスク	アドバイジング・サービス	ライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポート	学習法などについてのワークショップや催しのプログラム	学習者ができるだけ自然な環境で目標言語を使えるような機会	学習共同体を形成する場
1	ラーニング・サポートデスク	附属図書館	○			○	○		○		
2	e-Bookで多読	附属図書館	○								
3	多言語カフェ	全学教育推進機構								○	
4	OUマルチリンガルプラザ	マルチリンガル教育センター、国際教育交流センター	○	○	○		○	○	○	○	○
5	タンデム学習プロジェクト	人文学研究科・文学部	○				○		○	○	
6	日本語･英語･多言語カフェ[2)]	国際教育交流センター	○	○	○	○	○		○	○	○
7	ランゲージサポートデスク[2)]	工学研究科国際交流推進センター	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	アカデミックイングリッシュサポートデスク	人文学研究科・外国語学部	○	○			○	○	○	○	

4　大阪大学の学習支援担当者による情報交換会

3節で述べた経緯により、2022年12月に「多言語多文化学習支援担当者ネットワーク」を立ち上げ、対面にて関係者の顔合わせを行った。それ以降、春と秋の年に2回、オンライン（Zoom）で情報交換会を実施している。図1は、第1回の顔合わせの様子である。

参加者は、全学を対象とした学習支援の取り組みを実施している附属図書館、全学教育推進機構、マルチリンガル教育センター、人文学研究科／文学部・外国語学部、工学研究科国際交流推進センター、国際教育交流センター、ならびに特定の部局の学生を対象としているサービスや単位なしのプログラムを運営している基礎工学研究科、理学研究科、日本語日本文化教育センター、核物理研究センター、免疫学フロンティア研究センターの担当者である。



図1．第1回情報交換会の様子

表3．情報交換会の概要

回	内容	日時	参加
1	・対面での顔合わせ ・各取り組みの報告	2022年 12月23日（金）	17名 9部局
2	・意見交換会の方法、頻度などを話し合い ・広報体制についての情報交換	2023年 3月14日（火）	21名 7部局
3	・話題提供 OU マルチリンガルプラザ ・各取り組みの10月以降の活動予定報告	2023年 9月22日（金）	16名 7部局
4	・各取り組みの活動状況および予定報告 ・全体ディスカッション	2024年 3月13日（水）	15名 7部局
5	・話題提供：ランゲージサポートデスク ・ニューズレター発行について	2024年 9月19日（木）	12名 5部局
6	・大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業について ・各取り組みの活動状況および予定報告	2025年 3月11日（火）	17名 7部局
7	・話題提供：アカデミックイングリッシュサポートデスク ・各取り組みの活動状況および予定報告	2025年 9月18日（木）	15名 8部局

表3は、情報交換会の参加人数と内容を示したものである。第1回は、情報交換会の趣旨説明と各担当者からの取り組み概要の紹介を行った。第2回はZoomでオンラインミーティングを行い、効果的な広報媒体や方法についての意見交換を行った。これにより、関係者のメーリングリストが作成され、2023年度末には8つの取り組みの情報を統合するパンフレット（別添資料参照）、2024年度には大阪大学の全学ディスプレイシステムO＋PUS（オーパス）で放映する広報動画が作成された。第3回以降は、9月開催時には特定の取り組みの担当者が話題提供者となって活動紹介と質疑応答を行い、3月開催時には参加者それぞれが次年度の活動予定などを話す時間をとっている。

5　各取り組みの概要

本節では、それぞれの取り組みのミッション、運営体制、利用者層、平均的な利用者の概数、課題およびネットワークを作り情報交換会を行ったことの成果を述べる。

5-1　ラーニング・サポートデスク（附属図書館）

ラーニング・サポートデスク（以下、LSデスク）は、附属図書館内のラーニング・コモンズに設置された学習支援拠点であり、附属図書館所属のティーチング・アシスタントがラーニング・サポーター（以下、LS）との名称で活動している。2025年度は豊中・吹田・箕面の各キャンパスの図書館に計23名のLSが所属し、4名の職員とともにLSデスクの運営を担っている。

LSデスクでの活動の中心となるのは学習相談への対応であり、対応人数は、2024年度でのべ367名であった。多言語多文化学習に関連する相談としては、留学準備や語学検定試験の学習方法に関する相談、会話練習、母語以外の言語（英語・日本語・その他の言語）によるアカデミックライティングの支援が

挙げられる。さらに講習会の企画・実施、パスファインダー（特定のテーマについて文献を案内する小冊子）の執筆、学生選書といった多様な学習支援も展開している。

一方で、LSデスクで提供できるサポートの内容は、LSの専門分野や対応可能言語に依存するため、相談者のニーズを十分に満たせない場合があることが課題であった。情報交換会を通して他部局の支援体制を把握したことで、相談者に適切な窓口を案内することが可能になり、サポートの幅が広がった。

5-2　e-Bookで多読（附属図書館）

附属図書館では、学内構成員の言語運用能力向上を支援するため、多読図書の選定・購入に継続的に取り組んでいる。2015年度からは従来の冊子体に加えて電子版の多読図書の購入を開始し、翌2016年度には図書館Webサイト内に電子版のタイトルを一覧できる特設ページ「e-Bookで多読」（https://www.library.osaka-u.ac.jp/resource/e-tadoku/）を公開した。特に英語および日本語の多読図書については、電子版を積極的に購入しており、2025年11月現在での所蔵タイトル数は1,461点に及ぶ。電子版多読図書は、大阪大学の構成員であれば、いつでも、どこでも利用することができる。

ここ数年は毎年のべ1,000回以上のアクセスがあり、特に日本語の多読図書は年々アクセス件数が増加している。

電子ブックは実体が無く物理的な展示ができないために、図書館利用者に認知されにくいという課題があった。これまでは主に図書館Webサイトや館内掲示を通して広報を行ってきたが、本ネットワークへの参画により、電子版多読図書の存在と利便性を広く学内に周知する機会を得ることができた。

また、全学的な多言語多文化学習支援の枠組みに、図書館として教材の提供という形で貢献することができた。

5-3　多言語カフェ（全学教育推進機構）

多言語カフェは、学生の語学力向上と異文化交流を目的に2012年に開始し、現在は英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・朝鮮語・中国語の6言語で昼休みにグループセッションを実施している。運営は事務補佐員1名と留学生のチューター約25名で行い、年間参加者は約1,000～1,500名である。主な利用者は外国語学部や工学部の1年次生、留学希望者、交換留学生、教職員などで、年度により利用者傾向に変動が見られる。予約不要で参加できる気軽さから、専門分野・国籍・年齢の垣根を超えた交流の機会を提供し、学内でもユニークな会話カフェとなっている。

英語は1セッション4～5名、その他の言語は2名のチューターが会話を進行し、レベル差が大きい場合はグループを分けて実施している。日本人学生は約14か国の留学生と交流し異文化理解を深め、留学生には母語で話せる安心感と友人づくりの場を提供している。さらに、情報交換会の実施により、日本語カフェやタンデム学習等の情報共有、イベント日程の調整が可能となり、リーフレットを活用した学生への提案も円滑になった。

5-4　OUマルチリンガルプラザ（マルチリンガル教育センター、国際教育交流センター）

OUマルチリンガルプラザは、25言語の課外の自律的な学びをサポートする施設として設立され、教員2名、大学院生のティーチングフェロー・ティーチングアシスタント約20名、事務職員1名で運営している。

1年間で1,000名～1,200名ほどの利用があり、利用者層は、英語・日本語・多言語で傾向が異なる。英語学習は、実践的な口頭能力向上のニーズが高く、留学生を対象とした日本語学習は、アカデミックライティングと初級から中級レベルの日常会話に二極化している。多言語・多文化は、大学院生スタッフが企画運営するイベントやワークショップを通して学習意欲の向上に寄与している。

これらのイベント参加者の満足度は高いが、施設自体の開室時間が短いこと、会話練習の枠が限られていること、英語のアカデミックライティング支援が提供できていないことなどが課題であった。情報交換会への参加を通じ、提供していない言語の会話練習や、実施曜日の異なる他部局のサポートを知り、利用者にも案内することが可能になった。また、開催曜日や企画の重なりを調整することができるようになった。

5-5　タンデム学習プロジェクト（人文学研究科／文学部）

タンデム学習とは、学びたい言語を話すことがで

きる人同士が２人１組のペアとなり、お互いが得意な言語や文化を教え学び合うという言語学習方法である。本プロジェクトは短期留学生への日本語学習支援の一環として、文学部・人文学研究科（旧文学研究科）国際連携室が2012年度より始動したものであるが、現在は留学生のみに限らず、広く本学に在籍する学生を対象に毎学期参加者を募り、留学生と一般学生の双方に向けた学習機会の提供を行っている。現在は教員２名、大学院生のリサーチ・アシスタント４名にて運営している。

プロジェクトには毎学期50件程度の申し込みがあるが、参加者それぞれの希望や興味関心・言語能力のレベル判別を考慮すると、成立するペアは概ね10ペア程度となる。また、２人１組で行うタンデム学習では、言語ごとの需給関係にばらつきがあり、特に「日本語を学びたい英語話者」や「中国語を学びたい日本語話者」が不足する傾向にあった。情報交換会に参加して以降は、こうしたニーズを持つ学生への声かけの協力を得られるようになり、申込者数・成立するペア数が共に増加している（2025年度秋冬学期では111名の応募に対し、39ペアが成立した）。そのほか、タンデム学習の実施場所や学習方法に関する情報も得ることができ、サポート体制の充実に役立っている。

5-6　日本語・英語・多言語カフェ（国際教育交流センター）

日本語・英語・多言語カフェは、学生による国際交流団体B.S.P.が、昼休みに各キャンパスで実施しており、メンバーが会話進行や話題設定、参加者のサポートを担当する。吹田キャンパスでは、英語カフェと日本語カフェが毎週交互に開催され、毎回10名程度が参加し、半数以上がリピーターといった落ち着いた学びの場となっている。また、留学生による大阪大学留学生会により、フランス語カフェやスペイン語カフェも開かれている。豊中キャンパスでは、毎週水曜日に日本語カフェ、さらに英語カフェも不定期に開かれ、留学生が日本語に触れる機会と、国籍や所属を超えた交流の促進を目的とした交流が行われている。箕面キャンパスでは、日本語・英語は月に複数回、その他の言語は基本月１回とし、毎月15か国語前後の多言語カフェが提供されている。平日は、ほぼ毎日言語カフェが実施されているため、調整の負担が大きいことや、専攻言語の授業日によって参加者数が変動するといった課題も見られる。また、共通の課題として、担当者交代による運営のばらつきや、新規参加者の少なさなどが挙げられる。しかし、2025年前期には、延べ1,128人がこれらの言語カフェに参加しており、言語を通した学生間交流が広がる貴重な場となっている。ネットワークに参加したことで、学内の取り組みが整理され、スタッフから学生へ、より有益な情報伝達が促進されている。

5-7　ランゲージサポートデスク（工学研究科国際交流推進センター）

ランゲージサポートデスクは、2015年度に工学研究科国際交流推進センターによって、自律的な英語学習を支援することを目的として設立された。主な活動内容は、ライティング、プレゼンテーション、カンバセーションの３つのセッションであり、学生は自身の目的や伸ばしたいスキルに応じて選択することができる。講師は、個々のレベルやニーズに合わせて、個別（希望によりグループも可）にセッションおよびアドバイジングを実施している。

年間の利用者はおよそ600名にのぼり、その内訳は大学院生と学部生がおおむね半数ずつを占めている。学部生の多くは、留学を見据えたIELTSなどの英語試験対策を目的として利用しており、一方で大学院生は、論文やプレゼンテーションのチェックを主な目的としている。理系・文系を問わず、多様な分野・学年の学生が様々な目的で利用しており、本学の学生にとって欠かすことのできない支援機関となりつつある。

本デスクの利用を通じて、学生は自らの英語力を客観的に評価し、さらなる能力向上への意欲や積極的な学習態度を養うことができる。さらに、研究成果などを国際社会に発信する際の自信や主体性の向上にもつながっている。このような学生を一人でも多く育成することを目指し、本デスクは開設以来10年間にわたり、本学学生の多様な英語学習ニーズに個別に対応し、英語力向上に貢献してきた。

長期的かつ安定的な運用に向けては課題も多いが、情報交換会を通じて他部局の取り組みや課題を参考にして、必要に応じて関連支援との連携や機能の統合を図るなど、大学全体の教育方針と歩調を合わせた総合的な取り組みとして捉えることが可能となった。引き続き各部局と連携しながら、本デスクの役

割をさらに発展させ、持続的に学生の英語学習支援を推進していくことが求められると考える。

5-8　アカデミックイングリッシュサポートデスク（人文学研究科／外国語学部）

Academic English Support Deskは、ネイティブ・スピーカーによる個人指導を通じて、国際学会等での口頭発表や英語論文投稿といった英語研究発信能力の向上を目指すプログラムである。対面／オンラインのどちらでも受講可能で、学生・研究員・事務職員は無料で受講できる。本事業はマルチリンガル・エキスパート養成プログラム（MLE）の一環であり、外部委託先・担当講師との折衝などのマネジメント業務をMLE担当特任助教1名が、運営補助業務をMLE担当特任事務職員1名が担っている。

本プログラムは、2015年度に事業化されて以降、教員・大学院生・研究員の英語による研究発表準備支援を中心に様々な支援を展開しており、受講者の中には、国際学会で表彰された者もいる。最近では、学部生の検定試験対策や会話練習、事務職員の職務上必要な会話練習などの利用も広がっている。例年90%を超える稼働率を記録しており、2024年度の稼働率は93.2%（稼働371コマ／開講404コマ）だった。

本情報交換会に参加後は、他の英語学習支援の場にアカデミック・イングリッシュの相談があった場合、本事業を紹介してもらえるようになるなど、知名度向上につながる変化があったと考えている。さらに、他部局の運営方法等を知ることで、本事業の運営改善に繋げられることも意義深いと考えている。

6　ネットワーク構築の成果

本節では、まとめとしてネットワーク構築の成果を述べる。本ネットワークの構築と情報交換会の実施は、複数部局の関係者がネットワークを作って連携し、運営に関する情報や知見を共有することで機能強化が可能になり、結果として学習支援の質を高め、学生の学びのさらなる充実に繋げるための基盤が整ったと言える。

6-1　運営者が情報を得る場

情報交換会により、各部局のミッション・支援内容・運営体制・広報方法が共有できたことで、これまで可視化されていなかった学内の学習支援の全体像を担当者が把握できるようになった。同様のサービスを提供する担当者が互いの活動を知ることで、問い合わせ時の相互紹介やイベント日程の調整が可能になり、支援の重複や抜け落ちを防ぐ効果も得られた。また、他部局の取り組みや課題を参照することで、自部局の運営改善や機能の補完・連携の検討が可能となった。これらは、たとえ各取り組みの運営母体が学内に散らばっていても、本情報交換会の存在が、全学の学生が自分のニーズのマッチした学習支援にアクセスできる有益な基盤として機能するポテンシャルを持つことを示していると言えるだろう。

6-2　学生の学びの充実

各部局が提供する学習支援に関する情報や教材が共有されたり、学内における取り組みを一覧でまとめたパンフレットが作成されたりしたことで各事業の運営者が把握できるようになり、学生が自らの言語学習の目的に応じた学習資源へ容易にアクセスできるようになったことは、本情報交換会の大きな成果の1つであろう。これまでは、本稿で紹介してきたように、学内には多種多様な支援やリソースが存在しているにも関わらず、個々の取り組みだけによる広報活動では本学構成員からの十分な認知度を得られていなかった。そうした状況に対し、本情報交換会の取り組みとして、多言語・多文化学習支援の包括的な広報材料を準備し、学生がこれまで認知していなかった学習支援の選択肢を知る機会を増やすことができたことは、学生の課外における学びの幅を広げることへの貢献度も大きいと考えられる。また、LSデスクや多言語カフェ、タンデム学習など、支援の専門性や曜日・枠の制限から単独では対応困難であった部分に関し、適切な窓口を紹介できるようになり、学生のニーズにより合致した支援への送り込みが可能となった。これらは、総合大学としての強みも活かした、学生の自律的な学習環境の質的向上に寄与してきたと言える。

7　まとめと今後の展望

本稿では、大学における学習支援の状況を踏まえ、大阪大学で実施した学習支援担当者によるネットワークの構築と情報交換会について報告した。このよ

うなネットワークの構築は、田中・斎藤（1993）が、かねてより学習支援のあり方として提言してきた学生からの相談対応とリソースによって構築された学習支援システムが実現した形であると言える。

しかし、昨今の大学教育を取り巻く環境は大きく変化しており、従来の学習支援の枠組みを維持するだけでは、多様化・高度化するニーズに十分に応えることが難しくなりつつある。また、支援体制の維持そのものについても課題があることを念頭に置く必要があるだろう。林ら（2023）でも指摘されているように、学習支援事業の運営を有期雇用の教職員が担っていたり、支援の担い手が大学院生であったりした場合、業務の継続性が確保しづらい。本稿で紹介した情報交換会のメンバーの中にも、有期雇用の教職員が複数存在しており、恒常的な学習支援をいかに提供していくか、という話題が情報交換会に挙がることもある。

こうした人的リソースの課題はさることながら、AI技術の進展、社会環境の変化、大学の国際化を背景として、学習支援の在り方そのものを再検討する段階に来ていると言えよう。こうした中で、本稿で取り上げたような担当者間のネットワークは、独立して運営されてきた各学習支援事業における不足を補完し、人と人をつなぐ基盤として重要な役割を果たしている。今後は、ネットワークの継続的な運営と、そこで蓄積される実践知や経験をどのように共有・活用していくかが、持続可能な学習支援体制を構築する上での課題となろう。

謝辞

本報告の執筆にあたり、野原亜希専門職員（附属図書館）、金英子教授（全学共通教育機構）、宮島一葉・街道桂子・山岸美穂事務補佐員（国際機構国際教育交流センター）にご協力を賜った。この場を借りて、感謝を申し上げたい。

付記

本調査の一部は、JSPS科学研究費補助金 課題番号JP23K00607により実施されたものである。

注

1） 現在の国際機構国際教育交流センター
2） 取り組みが開催されている施設の設備を含む

参考文献

大阪大学（2025）『大阪大学プロフィール』https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/public-relations/profile/profile2025（2026年1月7日閲覧）

加藤信哉, 小山憲司（2012）「ラーニング・コモンズ文献案内：翻訳論文のまえがきに代えて」加藤信哉・小山憲司（編著）『ラーニング・コモンズ──大学図書館の新しいかたち──』勁草書房，pp.1-24

河井亨（2014）『大学生の学習ダイナミクス──授業内外のラーニング・ブリッジング』東信堂

関谷康，Maynard, J., & Cooker, L.（2010）「学習者の自律を支援するセルフアクセス学習」小嶋英夫, 尾関直子，廣森友人（編）『成長する英語学習者』pp.193–212, 大修館

田中望，斉藤里美（1993）『日本語教育の理論と実際──学習支援システムの開発──』大修館書店

文部科学省中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm（2026年1月7日閲覧）

文部科学省中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm（2026年1月7日閲覧）

林透，長澤多代，宝来華代子，大関智史，我妻鉄也（2023）「大学生のための学習支援の目的・担い手・方法に関する総合的研究──学習支援に関する全国調査を踏まえて──」大学教育学会誌，45巻，pp.157–161

米澤誠（2006）「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」カレントアウェアネス，No.289, CA1603
https://current.ndl.go.jp/ca1603（2026年1月7日閲覧）

Gardner, D., & Miller, L.（1999）. *Establishing self-access: From theory to practice*. Cambridge, Cambridge University Press.

JASAL（2025）'The Japan Association for Self-Access Learning, LLS Registry' https://jasalorg.com/lls-registry/（2026年1月7日閲覧）


ことばを学ぼう
文化を知ろう
多言語多文化学習支援
2025年版
大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA
発行：大阪大学国際教育交流センター
協力：大阪大学附属図書館、人文学研究科 / 文学部 / 外国語学部、全学教育推進機構、マルチリンガル教育センター、D3センター、工学研究科国際交流推進センター
言語
日 英 多
日本語 英語 多言語
キャンパス
豊 吹 箕 ON
豊中 吹田 箕面 オンライン
活動内容
話す 書く 読む 個別 グループ
1 ラーニング・サポートデスク
附属図書館
日 英 多 豊 吹 箕 ON
大学院生のサポーターが、対面やオンライン、Web フォームを通じて、授業の課題や留学、進学に関する相談、簡単なネイティブチェックのご依頼に対応しています。留学生のサポーターもいます。また、イベントを随時開催しています。
2 e-Book で多読
附属図書館
日 英 ON
レベルごとに使用する語彙数を制限し、辞書なしで読み進められる多読用資料の電子版です。英語と日本語の資料があります。キャンパス外からもアクセスできます。
3 多言語カフェ
全学教育推進機構
英 多 豊
全学教育推進機構（豊中キャンパス）カルチエ・ミュルチラングで昼休みに開催中。英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・韓国語（朝鮮語）・中国語を通じ、留学生だけでなく様々な学部・学年の参加者とも交流できます。
4 OU マルチリンガルプラザ
大阪大学マルチリンガル教育センター／
大阪大学国際教育交流センター
日 英 多 豊 吹 ON
25 言語の教材を使った言語学習が可能です。英語・日本語・中国語・韓国語の会話練習や多文化多言語理解に関するイベントを開催しています。施設での自習、グループ学習、言語学習アドバイザーへの相談、日本語チュータリングが可能です。
5 タンデム学習プロジェクト
人文学研究科・文学部
日 英 多 豊 ON
タンデム学習では，外国語の上手なパートナーとペアになり，お互いの言語や文化を学びます。学習のペース，内容，方法を自分で決められるほか，学習活動を通して，文化や言語の異なる友人ができるところが大きな魅力です。
6 日本語・英語・多言語カフェ
国際教育交流センター
日 英 多 豊 吹 箕
B.S.P. が各キャンパスで昼休みに言語カフェを主催しています。（ 国際教育交流センターが後援 ）日本語、英語、他言語のグループ会話が可能です。会話練習の他、国や地域、学部や学年を超えた交流のよい機会でもあります。
7 ランゲージサポートデスク
工学研究科国際交流推進センター
英 吹 ON
英語によるカンバセーション、ライティング、プレゼンテーションの３つのセッションから、必要な支援を個別で受けることが出来ます。英語ネイティブ講師が対応します。
8 アカデミックイングリッシュ
サポートデスク
人文学研究科 / 外国語学部
英 吹 ON
国際学会を念頭に置いた英語プレゼンテーションの個人指導、英語論文執筆サポートや、発表前後・質疑応答などを想定した会話練習など、受講者の研究活動をサポートする英語指導を行っています。医療現場での英会話や日常英会話の練習にもご利用いただけます。

資料：パンフレット